

「主よ、あなたの慈しみは天に、あなたの真実は大空に満ちている(詩編 36:6)」。神の「真実」を示されても、私たちはそのすべてを見通せない。しかし「慈しみ」の愛を受け、赦され、私たちは世に満ちるその真実に与りうる。真実は面影だが、そこに秘められた御業は予測を超えて現実となる。

「恵みの御業は神の山々のよう、あなたの裁きは大いなる深淵(36:7)」。峻厳な北欧のフィヨルドが思い浮ぶ。甲斐駒ヶ岳は峻厳で父的だが、「深淵」はこの地域には見当たらない。諏訪湖は水深が浅く、母的な気がする。

「父的・母的」という観点でこの詩編を味わうと、母的なところもあるじゃないか。「神よ、慈しみはいかに貴いことか。あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ(36:8)」。

右耳で父的な御言葉を、左耳で母的な御言葉を聞いて、立体感を確かめていたら、ふと気づかされることがあった。

誕生したイエスのお宮参りの折、神殿に起居する聖老人シメオンがイエスを讃美した(ルカ 2:29~32)。父ヨセフと母マリアは驚いたが(2:33)、かつて天使から告げられ、不可思議な事にも遭遇していたので「あっ、やっぱり」と畏れたのかもしれない。

シメオンはイエスについて、「神の山々(詩編 36:7)」の恵みの御業を讃美するだけでなく、大いなる「深淵の裁き(36:7)」も母マリアに語っている(ルカ 2:34)。「あなた自身も剣で心を刺し貫かれる—多く人の心にある思いがあらわにされるために(2:35)」。マリアの心が剣で刺し貫かれる、とはどういうことであろうか。

イエスは「多くの人を倒し、立ち上がらせる(2:34)」が、その創造的な愛は「反対を受けて(2:34)、殺される「定め(2:34)」となる。それが十字架という「しるし(2:34)」。マリアはやがて、しるしに立ち会い「心を剣で刺し貫かれる(2:35)」。

さて、右耳で聞く父的、左耳で聞く母的なもので、十字架の場面に集中してみよう。騒然とした場面だが、想像力を働かせ、耳を澄ませていると、聞こえて来る声がある。左耳には、心を刺し貫かれた母マリアの悲痛なうめき声。右耳には、イエスと共に苦しみを負う父なる神の沈黙が聞こえる。

まさしく、そうなのだ。イエスは父なる神の子であると同時に、母マリアの子でもある。母マリアの壮絶な苦しみは、「多くの人々の心にある思いがあらわにされるため(2:35)」であった。

私たちは自らの「心にある思い」が露わにされたなら、それを誠実に受け取ってマリアの悲しみに報いたい。

剣で心を刺し貫かれる「深淵」が私たちに分るのだろうか。マリアの深淵は誰にも分るまい。だが、十字架の傍らで沈黙し、マリアと同じ苦しみを負っている神だけは、マリアの心を知り給う。

マリアの嘆きで露わにされる私たちの「心にある思い」とは何か。苦しみ、悲しみ、恐れ、虚無、喜び、感謝のすべてを、神が御自分のこととされる真実だ。

十字架において神は、イエスと共に、母マリアと共に、御子を十字架につけてしまう罪深い人間と共におられた(23:34)。そして、今もなお。

「恵みの御業は神の山々のよう、あなたの裁きは大いなる深淵(詩編 36:7)」。私たちが「大いなる深淵」によって裁かれることも「恵みの御業」。「人の心にある思いがあらわにされる(ルカ 2:35)」ためにはキリストの光が不可欠。

十字架は「命の泉」から流れ出る真実の光(詩編 36:10)、とも言えるだろう。

《おまけのひとこと》

右目と左目で立体感を掴み 左耳と右耳で奥行を捉える するとどうだろう 死角である側面や裏面までが見える 沈黙の声までが聞こえるではないか 十字架上で 黙したままの父なる方の声が